特集 人々の思いがつなぐ重厚華麗な「踊屋台」50年ぶりに復活!

修復作業を終え半世紀ぶりに蘇った福島市唯一の「踊屋台」が、平成26年11月24日、晩秋の福島市街地を記念巡行しました。「ヤーレ、ヤレヤレ」の元気な掛け声とともに引き手を務めたのは、公募で集まった市内の小学校22校の児童約100人です。踊屋台一階のお囃子舞台には、小太鼓と大太鼓を乗せ、子どもたちがお囃子を奏で、二階の踊舞台では、伝統文化の継承に取り組んでいる「伝統文化みらい協会」の子どもたちが大人顔負けの舞を披露しました。

貴重な文化財を譲り受け、地域振興と復興のシンボルとして保存し、活用して行こうと市民有志が立ち上げた特定非営利活動法人福島踊屋台伝承会（以下、伝承会）の理事、髙倉秀一さんに復活に込めた願い、秘話などを伺いました。

◀1階が鼓を乗せるお囃子の舞台。2階は踊舞台。三方に竹の御簾が付いている

特定非営利活動法人
福島踊屋台伝承会 理事
髙倉 秀一さん

総ケヤキ造り。金箔を使った彫刻など重厚華麗な踊屋台

約50年ぶりに蘇った踊屋台は、高さ4.5メートル、幅3.5メートル、奥行き3.6メートルの二階建て。総ケヤキ造りで、社寺仏閣に用いられることが多いという唐破風※には、金箔を使った龍や鳳凰の彫刻が施されています。地元の宮大工、八木澤規矩夫さんが一年余りの歳月をかけた大型の踊屋台が完成したのは昭和31年のこと。それから10年ほど活躍した後、子どもたちの減少などによって引退。その後、現在まで保管されていました。

復活のきっかけは、「元気なふるさと福島をつくるために活用できないか」という所有者からの相談でした。子どもの頃、祭りで踊屋台に親しんだ髙倉さんは「大切に保管されていた踊屋台を見たときは、当時のことが思い出されて胸が熱くなりました。同時にこれから子どもたちが屋台を引き回す姿、それを眺めて元気をもらうお年寄りの姿が浮かびました」と話します。

※唐破風…中央は弓形で左右両端が反りかえった破風（屋根に施された装飾）。

▲踊屋台は昭和30年代前半から40年代前半にかけて市内を巡行

「このくらい残せないでどうする!!福島」を合言葉に市民有志が尽力

平成24年から関係者で検討を重ね翌年3月、市民有志で保存・活用のための準備委員会を立ち上げました。屋台の現状調査や、他県の屋台保管施設の見学や修復の依頼など、復活に向けての準備が始まりました。長く保存・管理していくためには新たな組織が必要と、平成26年には特定非営利活動法人を設立。「このくらい残せないでどうする!!福島」を合言葉に、まずは屋台を蘇らせることを目標に尽力してきました。

「市内で唯一現存している踊屋台を活用できるように修復し、街なかを巡行するなど活用を図り、そして将来に伝承するためには、かなりの費用がかかります。大事なのは、市民のみなさんが一緒にこの踊屋台を未来へ継承していく心だと思うんです」

記念巡行で披露された大人顔負けの舞

▲お囃子を奏でる子どもたち